真間の手古奈

国枝史郎

青空文庫

一

一人の年老いた人相見が、三河の国の碧海郡の、八ツ橋のあたりに立っている古風な家を訪れました。

それは初夏のことでありまして、河の両岸には名に高い、燕子花（かきつばた）の花が咲いていました。

茶など戴こうとこのように思って、人相見はその家を訪れたのでした。

縁につつましく腰をおろして、その左衛門という人相見は、戴いた茶をゆるやかに飲んで、そうして割籠のご飯を食べました。

その家はこのあたりの長者の家と見えて、家のつくりも上品であれば、庭なども手入れが届いていました。

「よい眺めでござりますな」

お世辞ともなくこのようにいって、生垣の向うに眺められる八ツ橋の景色を眺めおりました。

左衛門はその頃の人相見としては、江戸で一番といわれている人で、百発百中のほまれがありました。人相風采もまことに立派で、人の尊敬を引くに足りました。で、山間や僻地へ行っても、多くの男女に尊敬され、いつも丁寧にあつかわれました。

この時も左衛門は名のりませんでしたが、神々しい人相や風采のために、その家――泉谷（いずみや）という旧家でありましたが――その泉谷の家族達によって丁寧な態度であつかわれました。

「真間（まま）の継橋（つぎはし）へも参ったことであります。矢張（やは）りよい景色でござりました。ここにも継橋がございますな」

いかさま継橋が見えていました。

八筋の川が流れて居りまして、一筋ごとに橋がかかっていて、継橋をなしているのでした。

継橋の数が八ツなので、そこで八橋ともいうのでした。

「憐れな伝説がございます」

左衛門の前へ穏かに坐って、左衛門と一緒に茶を喫し、長閑（のどか）に話していた泉谷の主の、彦右衛門という人物は、こう左衛門にいった後で、その憐れな伝説を、古雅な言葉つきで話しました。

「仁明の御皇（みかど）の御代（みよ）でありましたが、羽田玄喜という医師がありまして、この里に住居（すまい）して居りました。女房と申すのがこの里の庄司の、継娘（ままむすめ）でありましたが、気だての優しい美しい縹緻（きりょう）の、立派な女でありまして、二人の間に男の子が、二人あったそうにござります。ところが玄喜は三十歳の時に、病気でなくなってしまいましたので、女房は気の毒な寡婦の身となり、子供は孤児となりまして、家計も貧しくなりました。が、女房は健気（けなげ）にも、他へ再婚しようともしないで、山へ登って行って薪を拾ったり、浦へ出て行って和布（わかめ）をかったり、苦心して子供を育てました。つまり二人の子を養育して、亡き良人（おっと）の業をつがせようものと、辛苦したのでございます。然るに長男が八歳となり、次男が五歳となりました時に、悲しい出来事が起こりました。というのは、或日でありましたが、川の向う岸に沢山（たくさん）の海苔（のり）が粗朶（そだ）にかかっているのを見て、母親がとりに渡りましたところ、後を慕って二人の子供がこれを渡って行きました。と流れが急でありましたので、二人の子供は溺れ死にました。どのように母親が嘆き悲しんだか？　想像に余るではありませんか。で、母親は髪をおろし、尼となって朝夕念仏をし、菩提を葬ったのであ

りますが、『橋さえかかって居ったならば、このようなことは起こらなかったであろう、どうぞして橋をかけたいものだ。将来人助けにもなるのだから』不図こんなことを思ったそうです。と、或日大きな流れ木が、河の岸へ横付けになりました『これこそ丁度幸いだから、この流れ木で橋を架けることにしよう』――で、橋をかけにかかりましたところ、流れが八筋ありましたので、次から次と流れ木を捨って、八ツながら橋をかけましたそうで。そこで八ツ橋という名が起こって、名所になったのでござります」

その時十八九にもなりましょうか、美しい娘が菓子皿を持って、奥の座敷から出て来ましたが左衛門の前へ菓子皿を置くと、しとやかに辞儀をいたしました。

で、左衛門も辞儀を返しましたが、

「ああ……これは……うむ……悪いぞ」

と、口の中でこう呟いて、まじまじと娘の顔を見ました。

人相見の左衛門でございます。何か娘の人相の中に、不吉の形を見たがために、そう呟いたのでありましょう。

が、彦右衛門には解りませんでした。

「私の娘、蘭でございます」

こう左衛門にひきあわせてから作男へ指図しようとして、庭下駄を穿くと裏手の方へ足早に行ってしまいました。

二

で、縁へは左衛門とお蘭と、二人だけが残ってしまいました。

と、左衛門でありましたが、何気ない様子で話しかけました。

「――から衣きつつなれにし妻しあれば、はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ――業平朝臣の有名な和歌は申すまでもないことでありますが、八ツ橋は名高い歌枕の土地ゆえ、この外にいろいろ有名な和歌が、うたわれていることでございましょうな」

するとお蘭は直ぐに答えました。

「――一筋に思いさだめず八橋のくもでに身をも嘆くころかな。――有名な宗長親王様の、このような和歌がございます」

「成程」

と、左衛門はうなずきました。

「で、私は申し上げましょう。物事はすべて一筋に、思い定めてはいけませんな。……とその他に和歌はございませぬかな」

「為家卿がうたわれましたそうで――もろともに行かぬ三河の八橋に、恋しとのみや思いわたらん」

「成程」

と左衛門はまたうなずきました。

「そこで私は申し上げましょう。恋しと思ってはいけませんとな。……その他に名歌はございませんかな」

「読人知らずではございますがこのような和歌もございます。――打わたし長き心は八橋の、くもでに思うことにたえせじ」

「成程」

と左衛門はまたいいました。

「蜘蛛手に思う恋の心が、突きつめて一つになった時に、恐ろしい一筋の恋となります。ご用心なされた方がよろしいようで」

すると、俄にお蘭という娘は、物悲しそうに俯向いて、口をとじてしまいました。蒼いまでに白い額の上へ、俯向いた拍子にもつれ

毛がかかって、顫えを細かく見せて居りましたが、烈しい感情が胸に起こって、それが顫わせているようでした。

と、その様子をしばらくの間、左衛門は見守って居りましたが、やおら膝をその方へ進ませ長い顎髭を前へ差し出し、さとすような声でいいました。

「死を覚悟していられましょうな？　正直にお話しなさりませ。私は江戸の人相見の、左衛門というものでございますよ。お前様の顔を一目見た時から、お前様の覚悟を見てとりました。でお前様に申し上げます。正直に私にお打ち明けなされ。何んとか私が取りはからいましょう。……恋でございましょう？　思い詰めた恋で？」

するとお蘭は顔を上げましたがこういうと直ぐに俯向きました。

「はい、そうでございます。……一人のお方でございましたら、何んでもないのでございますが……」

「成程」

と左衛門はその言葉を聞くと、苦しいような笑を浮べました。

「二人の男に恋をされて、それで悶えておいでなさるので」

お蘭は黙ったままでうなずきました。

「そこでお前様には二人の男へ、双方義理を立てるために、入水などなされようと覚悟されましたので？」

お蘭は黙ったままでうなずきました。

「そこで」

と左衛門はまたいいましたが、その声には皮肉がありました。

「そこでもう一つおうかがいをしますが、そのお二人の男の方の、お身分は何なのでございますか？」

するとお蘭は云おうか云うまいかと、躊躇したようでありましたが、思い切ったようにいいました。

「一人のお方は源次郎様と申して、この里を支配なされていられる、大庄屋のご次男様でございますし、もう一人のお方は喜之介様と申して、江戸の大きな絹問屋の、若旦那様にございます。源次郎様と喜之介様とは、お家がご親戚でありますので、久しい前から保養のために、喜之介様には源次郎様のお家へ、参られているのだそうでござります」

「成程」

と左衛門はいいましたが、いよいよその声には揶揄するような、皮肉な調子がありました。

「で、お前様にはお二人の中、どちらを愛していられますので？」

するとお蘭は物憂そうに、

「私はまことはどのお方をも、お愛ししているのではございません。ただお二人に同じように同時に愛を打ちあけられましたので、どちらの方へ靡いてよいやら、苦しんで居るだけにございます」

これを聞くと左衛門はいぶかしそうに、咎めるようにききました。

「二人ともお愛ししていられないなら、お二人へお前様の心を、お打ちあけなされておことわりなされたら、よろしいように思われますがな」

「はい」

とお蘭は申しました。

「でも私にはどういうものか、決心が付かないのでございます。はい、私にはどういうものか。……」

と、俄に嘲るような、かれた笑声が起こりました。左衛門が笑ったのでございます。

「――われも見つ人にも告げん葛飾の、真間の手児奈の奥津城どころ――お前様にはこの和歌をご存知でしょうな」「はい」

とお蘭は直ぐに申しました。

「二人の殿方に恋せられて、どっちへも靡いて行くことが出来ずに、入水して死なれた憐れに美しい、真間の手児奈という娘の墓を、山辺赤人というお偉い歌人が、詠まれた和歌にございます」

「さよう」

と、左衛門はいいました。

「で、お前様が覚悟どおりに、今のお二人に義理を立てて、入水してお死になされたなら、偉い歌人が憐れがって、名歌を詠まれるかもしれませぬな。……が、そうなるとこの八ツ橋の里に、二つの伝説が出来まして、迷惑のことになりましょう。……お前様のお父上がたった今し方私に話して下された、羽田玄喜の妻の伝説と、そうしてお前様の伝説とがな。……で、私は申しますよ。美しい物語にあくがれるのは、若いお前様の勝手ではあるが、その伝説の真似をして、自分自身に行うことは、この上もないつまらないことだと。……それよりもこの里に残されている、羽田玄喜の妻の伝説を、旨く利用なさいまし。……つまり源次郎という若いお方と、喜之介という若いお方へ、このようにお前様からおっしゃるのです『向うの河岸に海苔があります。私をいとしく思われるならば、橋を渡らずに川を泳いで、向う岸まで渡って行って、海苔をとって来て下さいまし。とって来たお方に靡きましょう』と。……もちろん私は源次郎というお方も、喜之介というお方も存じません。しかしお前様のお話によれば、いずれも立派な若旦那なので、力業だの危険な業だのには、大方不慣れでございましょう。で、漁師でさえ泳ぎかねるような、瀬の早い八筋の川を泳いで、海苔をとって来ようとはなされますまい。……さて、ご馳走になりました。そろそろ出かけることにいたしましょう。……」

後年左衛門は人にいったそうです。――

「そうだよ、お蘭という娘の顔には、死相が現れていたのだよ。これはいけないと思ったのでだんだん話しをして行くうちに、いろいろの古歌を知っていて、性質がひどく憧憬的だ。二人の男に恋されている。場所はといえば八橋といって、真間の継橋とよく似ている。ははあそれでは手児奈を気取って、二人の男へ義理を立てて、自分は美しく入水して死のう――恋を恋する気持といおうか、伝説を真似る心持といおうか……そういう心持でいるらしい。――と、こんなように思ったので、ああいう手段を教えてやったんだね。……お蘭という娘は実行したそうだよ。と、どうだろう源次郎という男も、喜之介という男も私の予想どおり、川を泳いでは行かなかったそうだ。その結果お蘭という娘は、柔弱の男に愛相をつかし、真面目な田園の逞しい男と、結婚したということだよ」

青空文庫情報

底本：「国枝史郎伝奇短篇小説集成　第二巻　昭和三年～十二年」作品社
　　2006（平成18）年12月25日第1刷発行
底本の親本：「読切小説名作帖」文松堂
　　1942（昭和17）年1月
初出：「サンデー毎日」
　　1929（昭和4）年1月1日
入力：H・ＹＡＭ
校正：門田裕志
2008年5月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

真間の手古奈

国枝史郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/